

第41回 埼玉県新型コロナウイルス感染症専門家会議 概要

1. 日時：令和3年8月3日（火）17：00～18：30

2. 会場：庁議室

3. 委員（敬称略 五十音順）

岡部 信彦	川崎市健康安全研究所 所長（WEB参加）
金井 忠男	埼玉県医師会 会長
川名 明彦	防衛医科大学校 教授（WEB参加）
近藤 嘉	日本労働組合総連合会埼玉県連合会会長（WEB参加）
坂木 晴世	国際医療福祉大学大学院 准教授（WEB参加）
讚井 将満	自治医科大学附属さいたま医療センター 副センター長（WEB参加）
竹田 晋浩	かわぐち心臓呼吸器病院 理事長・院長（WEB参加）
松田 久美子	埼玉県看護協会 会長
光武 耕太郎	埼玉医科大学国際医療センター 教授（WEB参加）
三村 喜宏	埼玉県商工会連合会会長（WEB参加）

4. 県側参加者

大野 元裕	知事
安藤 宏	危機管理防災部長（WEB参加）
山崎 達也	福祉部長（WEB参加）
関本 建二	保健医療部長
星 永進	保健医療部 参事
本多 麻夫	保健医療部 参事
板東 博之	産業労働部長（WEB参加）
岸本 剛	衛生研究所 副所長

5. 主な意見

ア 現状の分析・評価について

- 分科会やアドバイザリーボードでも議論があったが、人と人が会わないというのは無理かもしれないが、人の密度をとにかく下げて欲しい、接触の機会を少なくして欲しいということが共通認識であった。感染を防ぐというのは個人個人のこととなるので、あきらめずに粘り強く呼びかけていくしかないのではないか。（岡部委員）
- 現在入院されているかのほとんどは50代以下であり、第3波のような状況と比較すると合併症を持っていない元気な方々が多く、治療を行えば救命できる可能性は高い。しかし、その分医療機関に対する負荷が大きくなっていることも事実である。（竹田委員）
- デルタ株は従前のものとは別の疾患と捉えても良いほど大きく違う。医療機関に余裕はなく、ギリギリで最悪の状況を回避している段階である。（光武委員、川名委員）

イ 緊急事態宣言！包括的強化パッケージについて

- 警戒レベルを最大限に上げて新規感染者数を抑制し早期の収束を図ることが地域経済のためにも必要である。包括パッケージの実施を強力に推進していくことについて連合会としても積極的に協力していきたい。（三村委員）
- 感染対策の確認のため保育園を訪問したが、園児は黙食が徹底できていた。大人たちができていないのにどうして子供たちがきちんとできているのかと思ったほどである。パッケージにある感染防止リーダーとあったが、子供たちの取組を見て大人たちがしっかりとしなければならないと感じた。（坂木委員）

ウ アストラゼネカ社のワクチンについて

- アレルギーでm-RNA ワクチンが打てない人や海外で1回目の接種をアストラゼネカで行った人といった、ターゲットを明確に示していただき、少しでも多くの人にワクチンを打っていただきたい。（坂木委員）

- アストラゼネカのワクチンについては、他のワクチンに比べ、副反応の症状に差はあるものの、接種のメリットが上回ることには変わりがない。具合が悪くなった際にしっかりと対応ができる体制を整えることが重要である。
(岡部委員)

エ 現下の感染拡大を踏まえた患者療養の考え方について

- 比較的軽症な方については、宿泊療養で経過を見るといった現行の枠組みについて、本当に厳しい状況でどうにもならなくなってしまえば別であるが、なんとか維持していただきたい。(川名委員)
- どのような症状の方であっても医療へアクセスできることを前提に、その役割を分散化しようとする趣旨であるが、メッセージの出し方によっては、症状の軽い方がいいのかということになりかねないため、注意が必要である。(岡部委員)
- 看護のレベルは病院によって差があることから、一足飛びに国が言っていることをそのまま現場に当てはめていくことは無理があるのではないか(松田委員)